

図書館報

光 丘

No.152

文化を大切にするとということ

画家 佐藤 真生

夏の終わり帰省した折、ふと夕日が見たくなりひとり出かけました。高砂海岸に着いてみると昔丘の上にあったはずの白い灯台はなくなり、大規模な埋め立て工事によって海岸の風景はすっかり変わってしまいました。私は驚き共に思い出を失ってしまったような気がしてしばらく呆然とその場に佇みましたが、やがて吹いてくる海風、潮の香りそして高砂の海岸に沈む夕日は、昔と変わることなく美しいと感じることができました。実家から高砂までは自転車で約十分、子供の頃海岸は、釣りや、ゲイラカイト(西洋凧)などをするための絶好の遊び場でした。その頃に見た夕映えの空の色や海岸に流れ着く様々な漂流物から得たイメージーションは、現在の自身の制作活動に大きく影響しているように思います。私は砂浜を歩

き防波堤に腰を掛けました。穏やかな水平線に刻々と近づいていく夕日を眺めながら、なぜか過ぎ去った時間と「文化」のことについて考えていました。見えている夕日はあの頃と同じでも、四十数年経た時間と自分の中に蓄積された経験と知識がそうさせるのだと思いました。どのような中でも時間の流れに逆らうことなく、色々な経験と知識を積み重ねていきますが、それは所謂「人生」であって、個人的な歴史を「文化」と呼ぶことはありません。そのように考えると「文化」とは、個人ではなく価値を共有する多くの人々の努力によって育てられ、長い時間守られながら継承され生きていくものを指しているのだという当然の事実に気づかされます。

文化を学ぶには経験と知識が不可欠です。例えば、日和山の見晴らし台から最上川に沈む夕日を眺めた経験をした人ならば、老若男女を問わずきっとその美しさに感動した経験があることでしょう。さらに「暑き日を海にいれたり最上川」この有名な芭蕉の俳句を知っていれば、多くの人は芭蕉と同じ夕日を眺めている追体験によって感動がより深まるに違いありません。逆に芭蕉の俳句を知っていても最上川に沈む夕日を見た体験がなければ、芭蕉と同じ感動を理解することは難しいかもしれませぬ。俳句を知り、その場を体験することによって徐々に松尾芭蕉という人物の感動と自分の感動が重なり合っていくと江戸時代の庄内酒田の景色に気持ちが惹きつけられていくことでしょう。

全国各地には貴重な伝承文化があります。伝承文化の根底には知識だけではなく、人々の心の中にある自然に対する畏敬や感動の経験が数えきれない人の手によって何百年と

いう時間をかけて受け継がれてきた歴史があります。しかし今、高齢化や人口減少による後継者不足、現代人の価値観の変化などの理由から、残る文化と残念ながら消えていく文化があることも現実問題として存在します。インターネットの普及によって、人々は労せず机の上で膨大な知識を得ることができるようになりました。情報化社会は人々に多くの恩恵をもたらしましたが、その反面、指先で得た知識だけでおしゃべりする「物識り」も増えてしまいました。私たちは知識と共に五感で感じる経験の大切さを忘れないようにしながら、一度消えたら甦らせることが非常に難しい「文化」を大切にしていかなければならないと思います。



案外目にするここのない

白鳥の生態(終)

日本白鳥の会理事 角 田 分わかづ

羽繕いと油脂腺

白鳥のいろいろな水浴びについては前回述べました。そして羽繕う行動が見られます。朝目覚めた後、採食への飛び出し直前に多く行われる飛び込み水浴び後にも簡単な羽繕いは行われます。その羽繕いは、背中の翼に付いた異物を払い落とすように長い首を背中の上を何度も擦るように滑らせるものです。一般的に羽繕いという羽根を啜えて行うもののように思われますがこの行動も明確な羽繕いではないです。

健康保持のために行われる本格的な翼(よく)打(だ)水浴び(片翼打と両翼打走)と回転水浴び(側転と前転)の後には、ほぼ必ず羽繕いを入念に行います。その羽繕いは、ダニや寄生虫を取り除いたり、一日の生活や水浴びで落ちた油

脂分を補充したりするものによって一日に何度も行う羽繕いによって白鳥は自らの羽毛の健康を保持しているのです。

油脂腺から脂分を

白鳥が健康を保持できるのは、羽毛一本一本に油脂腺があり、水分をはじめ羽毛の間に空気を蓄え、保温が出来るからだと言われています。傷病鳥の中には、傷病で羽毛の手入れが十分に出来なくさらさら羽毛が汚れ、病気を

悪化させているものも見かけます。

白鳥が健康のために行う羽繕いに使用する脂は、他の鳥類と同様に油脂腺(尾脂腺)と呼ばれ、体の尾羽の付け根、腰にあります(写真1)。通常は羽毛に覆われてなかなか見ることが出来ませんが、羽繕うことは出来ませんが、羽繕う時に羽毛を動かした際に見ることは出来ます。油脂腺から分泌される脂は液体ではなくペースト状です。白鳥が体から分泌する脂がペースト状であることには合理性があり、なるほどと感心させられました。白鳥の体から分泌される脂が、液体だと油脂腺の周辺もベトベトになり汚れも付着しやすくなると考えられます。しかしペースト状のために白鳥は必要な量だけをくちばしで啜え取ったり、首や頭部に塗りつけ、効率的に羽繕うことが出来るのです。この脂が液体だとそうはいかないように思えます。油脂腺から分泌される脂は、バターよりも少し薄い黄色です。

羽繕いの主な二方法

白鳥が羽繕いで羽毛に脂分

を塗る方法としては主に(一)くちばしを使う方法と(二)擦りつける方法の二つがあります。

(一)くちばしを使う方法

くちばしで油脂を直接啜え取り、翼の羽根を一枚ずつ啜えながら塗りつけたり、くちばしで腹部を擦るようにして油脂を補充するように羽繕います(写真2)。もちろん油脂分を補充しながらも羽根の一枚一枚の状態をチェックし、寄生虫やダニなどを取り除くこともしているようです。

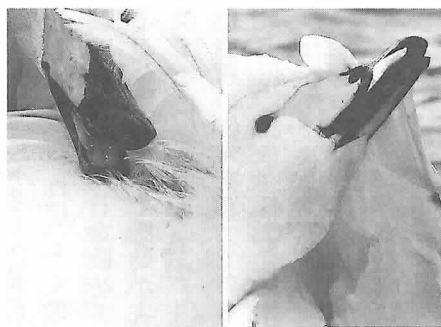


写真2 くちばしで

(二)擦りつける方法

油脂腺に直接頭部や首を擦りつけて油を付着させます。そしてその頭部や長い首を器用に動かしながら翼の表面や



写真3 擦りつけて

腹部の羽毛などに擦りつけて油を塗りつけます(写真3)。羽繕いで羽毛の一枚一枚に必要な油脂分を付着させることにより、防水効果が生じ羽毛の間に水が入り込むこともなくなります。そのため水の上に浮かんでいることも出来ます。そして身震いすることによって羽毛を膨らませたりしながら空気層を自由に作り出し保温機能を調整したりしています。

このように白鳥の羽繕いは、水浴びによって羽毛に付着している汚れや寄生虫等を洗い落とし、その後の羽繕いで油脂分を羽毛に塗りつけることで成り立っているようです。



写真1 油脂腺

古代オリンピックとオリイブ

東北公益文科大学教授 遠山茂樹

周知のように、二〇二〇年には東京でオリンピックの開催が予定されている。東京での開催は二回目で、第一回目は一九六四年であった。当時、小学生だった私は宮城県の片田舎でオリンピック競技をテレビで観戦しながら、「東洋の魔女」こと女子バレーボールチームが勝利し、日本中が沸き返ったのを今でも覚えている。

バレーボールに代表される団体競技は近代オリンピックでは当たり前だが、古代オリンピックでは皆無であった。古代オリンピックでは個人競技しかなかったのである。競技種目のメインは、陸上競技とレスリングなどの格闘技であった。一九二メートルの距離を走るスタディオソ走と呼ばれる競技では、フライングした者には鞭打ちの刑が科せられた。「スタディオソ」とは古代ギリシアの距離(長さ)の単位で、競技場もスタディオソと呼ばれた。英語の「スタジ

アム」はこれに由来する。五種競技もあったが、古代のそれは徒競走や槍投げなどの陸上競技が中心で、現代のいわゆる近代五種の構成種目であるフェンシング、射撃、馬術、水泳はなかった。

近代オリンピックとはだいぶ趣が異なるものもある。たとえば走り幅跳びがそうで、競技者は反動をつけるため両手にハルテレスと呼ばれる二つ一組の重石を持って跳ぶ。この重石は二つ合わせて約八キログラムの重さがあったというから、手に持って跳ぶにはかなりの重さだ。着地と同時に重石は手離すのが決まりであったが、たんに遠くまで跳ぶだけでなく、空中姿勢も重視された。跳んだ直後に空中で上半身と両足が平行になる姿勢が「へ美形」とされ、神に捧げられたのである。

そもそも古代オリンピックは最高神ゼウスに捧げる祭典であり、神事であった。競技者

は男性のみで、競技はすべて全裸で行われた。古代ギリシアの彫像や壺絵に描かれたギリシアの神々を見ると、男性は裸体で表現されているのに対して、女性は着衣をまとっている。古代オリンピックの競技者が全裸で競技を行ったのも、神々に似せてのことだった。肉体を鍛えたのも同様で、「完璧な美」をそなえた神々に近づいたためである。選手は自分の肉体をできるだけ美しくみせるため全身にオリイブ油を塗った。オリイブ油が体に塗る香油として使用されていたことは、ホメロスの叙事詩にも記されている。

オリイブ油の用途は多様で、食用、化粧用、灯火用、薬用、工業用としても使われていた。古代ギリシアの植物学者テ

オフラストスによれば、オリイブの根は水分をよく吸収し、岩だらけのところでも間隙をぬってほびこる。そのうえ乾燥にも強い。まことにオリイブはギリシアの風土に適した樹木なのである。オリイブがギリシアの国樹になっているのも頷ける。キュウリ、トマト、玉ねぎなどを角切りにし、それにオリイブの実と山

羊の乳から作られるフェタチーズを加えたギリシア風サラダでも、オリイブは欠かせない。もうかれこれ二十年も前のことになるが、家族三人で訪れたギリシアの地で食べたグreek・サラダの味は格別だった。それはギリシア北西部に位置するザゴリア地方の小さな村の名も無いレストランで供されたもので、典型的な「ホリアティキ」(田舎風)サラダだった。

古代オリンピック競技の勝者には栄光の印としてオリイブ冠が与えられたが、オリイブは平和の象徴でもあった。古代オリンピックが始まったのは紀元前七七六年とされているが、当時ギリシアでは各地に都市国家が誕生し、国家間の戦争がたえなかった。そこでエリス(現イリア県)の王

イフィトスは何とか戦争をやめさせようとデルフィ神殿に赴き、アポロンの神託を仰いだ。アポロンのお告げはこうであった。「ギリシア全土から代表者を集めてゼウスに奉納する祭典(オリンピア祭)をおこない、その期間は戦いをやめよ」。祭典期間中、参加者は休戦の証として自らの胃をオ

リンピアの神殿に納めた。休戦の誓いをたてた者はオリイブの冠をかぶっていたが、オリイブが平和の象徴とされたルーツはここにある。ついでながら、月桂冠は元来オリンピア祭とは別のピュティア祭(音楽、演劇、詩歌の祭典)の勝者に授けられたもので、英国の一流詩人が「桂冠」詩人と呼ばれ、称賛されるのはこの故事に基づく。オリイブ冠も月桂冠もともに勝利の栄冠であることに変わりはない。

近代オリンピックは一九〇六年、フランスの教育者クワレルタン男爵の提案によって始められた。十九世紀後半にはドイツの考古学者を中心にオリンピアの発掘調査が行われ、古代オリンピックへの関心が高まっていた。その一方で、当時はクリミア戦争、普仏戦争、露土戦争といった国際的な戦争が相次いだ。古代オリンピックの復活を思い描いていたクワレルタンの心中を察するに、古代ギリシアの都市国家間の戦争と一九世紀の国際情勢が二重になっていたのかもしれない。オリンピックが「平和の祭典」といわれるのも故無しとしない。

吉野弘さんの詩をめぐる対話 第8回 最終回

「生命は」の詩人が語る世界内存在

酒田・詩の朗読会 主宰 阿蘇孝子
月刊SPOON元編集長 佐藤晶子

佐藤 一昨春秋、「全国海づくり大会」が山形県で開催されたとき、天皇皇后両陛下ご臨席のもと、阿蘇さんは酒田の希望ホールで、吉野さんの「生命は」を朗読なさったそうですね。特にこの作品を選んだ理由を聞かせていただけますか。

阿蘇 豊饒の海を得るためには、健全な森を築かねばならない。そのように物事は相互に影響しあい、循環し、成り立っている。まさにへ自分自身だけでは完結できないように／つくられているらしい。『生命は』の世界観は、大会のコンセプトにぴたりとあてはまり、そして呼応しているように思えました。それが、この作品を選ばせていただいた理由です。

佐藤 『吉野弘全詩集』には、「生命は」というタイトルの作品が二つ収録されています。推敲を重ねて発表した四作目は第六詩集『風が吹くと』、同じモチーフに加筆した五作目は第五詩集『北入曾』収録作品です。



◎SPOON 1991

吉野 弘
(よしの・ひろし 1926~2014)

酒田市出身。酒田市琢成第二尋常小学校、酒田市立商業学校を卒業後、石油組合入社。戦後は、労働組合執行部で活動。肺結核闘病中に詩作を開始。1952年、『I was born』で詩壇デビュー。1957年、酒田の『消息』より第1詩集『消し』出版。1972年、第4詩集『感傷旅行』で読売文学賞を受賞。1994年、青土社より『吉野弘全詩集』を刊行。

吉野さんは、ある日、自宅の庭に咲く芙蓉の花を眺めていて、オシベが長く突出しているのに、メシベは基部に低く並んでいることに気づいた。自家受粉を避けるための植物の知恵なのだろうと思いついたもの、それなら、他者である風や鳥や昆虫の協力をあてにしなくては、受粉できないことになる。その不思議を疑問に感じたことから、作品を書き始めたのだそうです。最終バージョンの五作目で吉野さんはへ生命は／その中に欠如を抱き／それを他者から満たしてもらおうのだへそのように／世界がゆるやかに構成されているのは／なぜ？と問いかけて、私も あるとき／誰かのため

の虻だったろうへあなたも あるとき／私のための風だったかもしれないと結んでいます。『詩のすすめ』という本の「代表作を求められて」と副題のついた文章で、吉野さんは、五作目の「生命は」をみずから挙げています。詩人の静かな自負を感じさせますが、この五作目は、四作目にへ世界は多分／他者の総和」というフレーズが加筆されていて、読むたび、吉野さんが酒田で書いた初期の名作「奈々子に」のへ自分があるとき／他人があり／世界がある」という一節を思い浮かべます。吉野さんの心の中には、生命の秘密を探り、世界のあるべき姿を希求する世界観が、初期作品から一貫して流れ続けていたのではないかと感じますが、阿蘇 「ヒューマン・スペース論」という作品があります。逃亡したネジのことを書いた「謀叛」や、やせて小さくなった消しゴムのことを書いた「小さな

旅」と同質の雰囲気醸す詩です。へバスの運転手が／運転台に着くと／バスの運転手は／四角なバスである。運転手がバスになるという詩(笑)。彼はへ内部に配慮をみながら／外部への目覚めた皮膚をもち／走る。そんなふうにより自身を運転したことがあるか。へいや、その前に／君自身を満たしてみろ、君の配慮で。／外への目覚めた皮膚が出来るまでへ君が／君自身を配慮で満たすなら／町を、地球を、もちろんバスを／同じく君の配慮で満たす筈。この吉野さんの詩の言葉は、詩人の見方、考え方が如実に表現された、象徴的な詩句だと思います。佐藤 哲学の世界では、「世界内存在」という言葉は主に「人間存在」を指すようですが、吉野さんにとっては、世界を構成する万物が「世界内存在」であって、そのすべてが宇宙の摂理に基づいて、相互に関与しあって、生命と世界を形成しているはずだ、という世界観なのですよ。

吉野さんのもう一つの代表作「祝婚歌」も、夫婦について語りながら、実は自己と他者、自己と世界の関係性にまで配慮が及んでいる。そして「光を浴びて、風に吹かれながら、胸が熱くなる二人であってほしい」という言葉からは、吉野さんが望んだであろう肯定的な世界観が伝わってくるように感じます。阿蘇 他者の身になる。他者の視点を持つ。へ他人の運命を／君自身の運命と感ずるようにならねば。昆虫、小鳥、犬、樹木、生きとし生けるものだけでなく、前述したネジや消しゴムに至るまで、この世界に存在する、あるいは存在していた事物すべてと共にあり、それを自身のこととして掬いとろうとした。そのことを「奈々子に」という作品に託し、「生命は」で結晶させ、身近なこととして「祝婚歌」に示したのではないかと。そんなふうにして思えてならないのです。佐藤 吉野さんの作品を読んでいると、今でも吉野さんは、私のための風であり、光であると感じます。天上の詩人に感謝の気持ちを抱きたいと思えます。四年間にわたって続けてきたこの連載は、今回で終了します。長い間、図書館報「光丘」の誌面やホームページで読んでくださった皆様は御礼申し上げます。阿蘇 これからも「宝の日」の朗読会などで、吉野さんの作品のすばらしさを伝えていきます。吉野さんの作品を愛する人々の暖かい輪が大きく豊かに広がっていくことを願っています。

◇光丘文庫資料紹介◇
『^{あけがらすはや}暁烏敏が大川周明へ宛てた書簡』

光丘文庫古典籍調査員
田村真一

拜啓 過日は尊書

種々御高教に接し

有難く存候時局

輪廻の第一として

小学教師の俸給

増加の御意見至

極同感に候東上中

各方面の方々にお目

にかかり時局の容易

ならざる事を感じ申候

増々御健祥にて臣

民道に御精進の

事念上候小生目下

四国各地講演旅

行中に候 月末寄帰宅

の予定に候 向寒

の折柄お大切に遊

ばされ度念上候

十二月十一日

敬具

暁烏敏

大川周明様

これは暁烏敏が大川周明に宛てた書簡である。年代は記されていないが、文面から推して昭和十六年と思われる。

この書簡を読むに二人は昵懇の間柄であることが伺える。暁烏敏は（一八七七〜一九五四）明治十年に石川県松任市北安田の真宗大谷派明達寺に生まれた。

哲学者であり僧侶でもある清沢満之（一八六三〜一九〇三）に暁烏は師事する。

清沢は仏教の救済は死後の世界にあるのではなく、生きていゝる「ただ今」現在にあると、説いた。

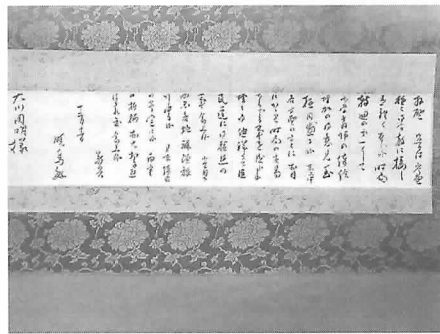
暁烏は清沢の主峰する「浩々洞」（こうこうどう）に入り、多くの仲間と寝食を共にしながら仏教を学んだ。

暁烏は怪僧と称された。女性問題では多くの非難をあび、また戦争観も問題視された。暁烏は『萬歳の交響楽』の中で戦争について左記のように述べている。

「太平が続くと、人間が利己的になる。この利己心を打破するには、戦争は最もよい導きである。働いている軍人は、既に利己的な生活を解脱せしめられて神仏の生活に入らしめられている。この意味において戦争は人間を浄化せしめるものである。戦争は人間浄化の重大な神業である」

当時、真宗大谷派の教え（死後に救われる）とは異なるとされた清沢満之が説いた仏教の教えは教団内から批判的に観られていた。

「浩々洞」の面々が清沢の説いた仏教を声高に叫んだにもかかわらず、暁烏が矢面に立ち批判された。その背景には、当時、教団内外からカリスマの人気を博していた暁烏への嫉視があった。



暁烏が大川へ宛てた書簡

教えに耳を傾ける人は多い。大川周明（一八六六〜一九五七）は戦前の日本を代表する思想家である。大川は明治十九年に飽海郡西荒瀬村（現・酒田市）に生まれた。

東京帝国大学卒業後は定職には就かず、日本古代の研究や印度の独立運動へと傾斜していく。

大川は欧米からの東アジアの解放と日本精神に基づく国家改造運動に専心した。

昭和七年には五・一五事件に連座し投獄されている。東京裁判において民間人から唯一、平和に対する罪で起訴された。が、大川は裁判中、奇怪な行動をとり病院送りとなったため、無罪という形となった。

大川については戦後七十二年が経た今日においてもその評価は定まっていない。酒田出身の哲学者・齋藤信治は大川周明の行実について、大川没後百年を経て、漸く大川思想が明らかになってくるのではないかと推察する。

暁烏敏が大川周明に宛てた書簡を読んだ際、筆者は驚きを禁じえなかった。両者は思想的に両極に位置すると、考

えていた筆者にとって、暁烏と大川が親交を結んでいたとは考えもしなかった。

暁烏は大政翼政会との繋がりがあり、また、政府や軍の中核とも密接な関係があったとされる。このような暁烏の人脈の中で大川との出会いがあったのであろう。

暁烏と大川はそれぞれの立場で青少年教育に目を向けた。実現はしなかったものの、暁烏は仏教の教えとそれに基づく生活を学ぶ道場として、自坊・明達寺に私塾・大日本文教院を建てようとした。その目的は真の仏教徒を生み出すことであった。

大川は昭和十三年、東京都麹町（現千代田区）に「東亜経済調査局附属研究所」通称大川塾を開設。

その目的は「将来の日本のために、アジアに進出できる有為なる青年の養成」である。全国から優秀な十代の若者が参集し、二年で卒業すると東アジアの地に赴いた。

暁烏が大川に宛てた書簡は僧侶と思想的な社会運動家という立場を異にしている。二人が親交を結んでいたことを示す貴重な資料と言える。



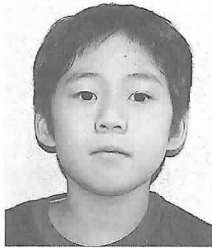
読書感想文

もつとたくさん

おはなししようね

酒田市立平田小学校

一年 とがしりょう



「あつ、これ、ぼくとおぼんみ
たいだ。」

このほんをみて、ぼくが一
ばんにおもったこと。ひょう
しのおぼあちゃんが、ぼくの
おぼんとそっくりだったから
おぼんとは、やまがたにすん
でいる、ぼくのひいおぼあ
ちゃんのことだ。ことしで
八十八さいになる。やさしく
て、はたらきもののおぼん。
このほんにでてる、つば
さくんのばあばは、「わすれて
しまう」びょうきだ。いつも

「だいじょうぶだよ。」とやさ
しくあたまをなでてくれたば
あば。つばさくんは、ばあばが
だいじょうぶだった。ぼくのおぼ
んとにている。ぼくはいたず
らっこで、みんなにしかられ
てばかりだけど、おぼんは
ほめてくれる。

「りょうはやさしい。めんごだ
なあ。」

って。あつたかくて、ほかほか
したきもちになる。ぼくがい
たずらで、おぼんのはなにつ
けたシール。おぼんはよろこ
んでいつまでもつけていたら
しい。おぼんらしいなあ。

「わすれてしまう」びょう
き？ぼくは、とてもふあんに
なった。つばさくんのばあば
は、だんだんびょうきがひど
くなつた。どんぐりのおかき
やかればのおちやをだすばあ
ば。あんなにだいじょうぶだ
ばあばのへやに、つばさくん
がいなくなつたきもち、ぼ
くにもわかるきがした。かな
しくて、つらかつたんだよね。
ひとばん、いなくなつたばあ
ばがあさかえつてきた。ごめ
んねといつたつばさくん。「だ
いじょうぶだよ。」といつてく
れたばあば。ぼくは、おぼんを
おもいだしてなみだがでた。

「ひをけしわすれてこまるの
よ。」とやすこおぼあちゃんが
いつていた。そういえば、いち
どころでこしをうってから、
おぼんはまえよりもねている
ことがおおくなつた。ときど
き、おなじことをなんかいも
いつている。

ねえ、おぼん。おぼんがいつ
かぼくをわすれても、ぼくは
いつまでもおぼんをわすれな
いよ。こころのなかにいつば
いおぼえておくからね。ぼく
は、おぼんにでんわをかけた。
これからはもつとたくさんお
はなししようね。

《ばあばはだいじょうぶ》

第六三回青少年読書感想文

コンクール山形県審査会

小学校低学年の部 最優秀

平成二十八年度から実施し
ている所蔵資料の移転作業に
伴い、昨年九月二十五日から
臨時休館しておりました光丘
文庫(図書館中町分館)につき
ましては、すべての資料移転
作業が終了したことから、

一月四日から市役所中町庁舎
(旧庄内情報プラザ)五階に
おいて閲覧サービスを再開し
ています。

今回の移転により、明治期か
ら昭和にかけての貴重な雑誌
(約一万六千冊)についても閱
覧可能となりましたので、ぜひ
ご利用ください。なお、具体的
な雑誌名については、市役所
ホームページ内の光丘文庫の
ページに掲載している「所蔵雜
誌一覧」をご覧ください。

なお、休館日が土曜日・日曜
日、祝日であることから、平日
の来館が困難な場合について
は、ご予約のうえ総合文化セ
ンター内の中央図書館で閲覧
に供する方法による対応を行
いますので、あらかじめ光丘
文庫にご相談をお願いいたし
ます。

車でご来館の場合は、中央
地下駐車場をご利用ください。
利用時間に応じて無料駐車券
を発行します。

「雑誌スポンサー」の

募集について

酒田市立図書館では、図書
館(分館を含む)で現在定期購

読している雑誌のスポンサー
となつていただける事業所を
随時募集しています。

「雑誌スポンサー」とは、
図書館の閲覧コーナーに設置
している雑誌の購読費用を
負担していただき、その雑誌
の最新号カバーにスポンサー
の広告を掲載する制度です。
カバーの表面にスポンサー名
を、裏面にはスポンサーが作
成した広告を掲示します。

現在、計八社(団体)から十
二誌についてスポンサーを引
き受けていただいています。
スポンサーは、企業、事業主、
商店、団体(病院、協会、組合
等)を対象とします。(個人は
対象外となります。)

詳しくは酒田市のホーム
ページ内の図書館ページを
ご覧いただくか、直接図書館
にお問い合わせください。



雑誌コーナー